

7. 14 神功皇后社について

「八幡の語り草」第 115 話(96 頁)

祭神 神功皇后（息気長足姫尊）

神功皇后は人皇第十四代仲哀天皇のお妃で、第十五代応神天皇（八幡大神）の母君である。

今から三百年程前のこと、一人の修験者が当村（杉山村）を訪れ、清水がこんこんと湧出る清浄な森に、神功皇后のご分霊を祀り、村人に「これは山の神である、毎日信心するがよかろう、ことに安産を願う者、子宝を望む者は、小豆飯を供えるべし、必ず靈験あるべし」と告げて、何処ともなく旅立っていった。それからは、毎年十二月の寅卯の日に小豆飯を供えて、安産を祈願するようになった。村では難産に苦しむ者など一人もいなかった。この話が近隣の村々にも伝わり、お参りする人々でにぎわうようになった。

境内火と一隅に、「皇后の井」があり、昔は安産を祈願する人々は、この井戸で身を淨めしてからお参りしたものだという。昔は、楠の板で枠組された井戸で、常に清らかな水を湛えていたという。平井三井の一つで、清水が丘という地名もここから名付けられたものである。